

編集後記

正岡子規は、病に苦しみながら俳句・短歌の革新に力を尽くし、漱石・虚子・碧梧桐・伊藤左千夫・長塚節など多くの俳人・歌人を育て上げました。

無得庵小川刀耕老居士は、「禅宗の悟り」について触れた文章と【病気の境涯に処しては、病気を楽しむということにならなければ生きていても何の面白味もない。】という文章とを取り上げられ、子規の境涯は『十牛の図』第六の「騎牛帰家」の境涯であり、平常心、遊戯三昧の心境にあったと賛嘆しておられます（『剣道講話』）。その心境は、阿鼻叫喚の病苦三昧の中で自得されたものでありました。

子規は、死せる俳諧に禅味を加えて崇高なものだと芭蕉を高く評価し、【俳諧は禅なり、禅にあらず。】の文章で始まる『俳諧無門関』を書きました。また『碧巖集』については、山また山の名文に驚いたことを写生文仲間に吹聴しております。

子規庵には、いつも抹茶が用意されておりました。子規は心を静めるために茶の湯を習ってみたいと言い、【坐禅は動かぬ茶の湯なり。茶の湯は動く坐禅なり。】と書いております。

【宗教を信ぜぬ余には宗教も何の役にも立たぬ。】と書いた子規ですが、長命であれば漱石と共に禅に参じたであらうと惜しまれてなりません。

合掌 編集子

禅31号（通巻211号） 定価500円（税込）

平成22年3月25日発行

編集人	中村孝
発行人	佐瀬長和

発行 人間禅出版部

〒272-0827 千葉県市川市国府台6-1-16

人間禅本部道場内

ファックス 047-373-7561

Eメール zenshi@ningenzen.org

ホームページ <http://www.ningenzen.org>